

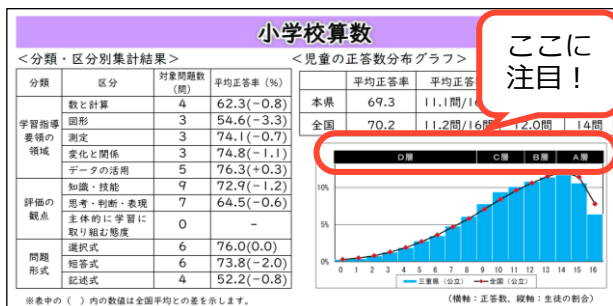


※学-Viva：「Viva」は、「生きる」という動詞から生まれた言葉です。三重の「学び場」が生き生きするイメージで名付けました。

子どもたちのつまずきに対応した授業改善を！ ～令和3年度授業改善サポートプランの活用～

「令和3年度授業改善サポートプラン ～全国学力・学習状況調査結果 分析報告書～」を11月下旬に各学校に送付しました。令和3年度全国学力・学習状況調査結果の分析、各教科の課題に加え、調査結果を授業改善にどのように生かすのかについての4つのステップを示しています。学校全体での課題の改善に向けた組織的・継続的な取組にぜひご活用ください。

授業改善サポートプラン活用例



①三重県や全国の結果と比べながら、自校の子ども達の状況を確認します。

正答数分布グラフ

自校の子どもたちの学力層(A～D層)による分布が分かります。

「自校はC層が多いから、基礎・基本の内容について、理解・定着が図られているかを丁寧に確認していく必要があるな。」といった子どもたちの状況に応じた手立てを考えることができます。



②三重県や全国の結果と比べながら、自校の子どもたちがどこでつまずいているのかを確認します。

解答類型と反応率

課題が大きい問題の解答類型の反応率・無解答率が確認できます。子どものつまずきに応じた授業改善に役立ちます。

②課題の改善に向けた指導のポイント

異種の二つの量の割合として捉えられる数量を用いて、目的に応じてその大きさを比べ、表現できるように指導する。

■学習指導要領における領域・内容

5年生 C 変化と関係
(2) 異種の二つの量の割合として捉えられる数量に関わる数学的活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア 次のような知識及び技能を身に付けること。
(ア)速さなど単位量当たりの大きさの意味及び表し方について理解し、それを求めること。

解答類型	三重県	全国	正答
1 1 と解答しているもの	54.3	55.8	●
2 2 と解答しているもの	24.3	22.9	
3 3 と解答しているもの	7.2	6.9	
4 4 と解答しているもの	10.1	9.5	
99 上記以外の解答	2.9	3.5	
0 無解答	1.2	1.4	

③授業アイデア例

③ 速さを比べるとき、数値が小さい方が速い場合について考える。

- 50m走のときは、数値が小さい方が速かったですね。同じように、数値が小さい方が速いときは、どんな場合がありますか。
- 25mを泳ぐ速さを比べるときにも、時間を短い方が速いです。
- 長さをそろえているときには、時間をそろえているときと違って、数値が小さい方が速いですね。

速さについて、どちらが速いかを調べる場合には、時間と道のりのどちらを単位量にするかによって、求めた商が大きい方が速い場合と、小さい方が速い場合があります。商の意味を理解して判断できるようにすることが大切です。

活用ポイント！

速さの学習では、児童の日常生活の場面に関連付けて、速さのイメージをもつことができるようにすることが大切です。(例)50m走は時間短い方が速いです。10.0秒と8.2秒では、8.2秒の方が速いです。私の50m走のタイムは10.0秒です。秒速で表すと秒速5mです。秒速でも表すことができますね。

④ワークシート例

<小学校5年生の学習内容> 答え

数と計算

わり算の式と商の意味

年 組 番 名前

1 右の表は、AさんとBさんが走ったときと、かかった道のり(m)、時間(秒)をそれぞれ表しています。

名前	道のり(m)	時間(秒)
Aさん	50	10.0
Bさん	50	8.2

◆解説 (きより)÷(時間)で、1秒あたりどれだけの速さを求めたか求められています。

◆解説 (時間)÷(きより)で、1mあたりどれだけの時間をかかったか求められています。

みえの学力向上県民運動
ホームページに掲載しています。



③授業アイデア例の「ポイント」や「活用のポイント」で子どもたちのつまずきに応じた授業を具体的に考えます。

ポイントについて

特に注目・留意すべき指導上のポイントです。

本授業アイデア例 活用のポイント！について

他の学年・各教科等での指導に生かすことなど、参考となる情報や指導上の留意点等が載っています。

④子どもたちの理解・定着状況の確認等に活用します。

- 全国学力・学習状況調査の課題に対応したワークシート例を載せています。
- 目的に応じて、朝の学習、家庭学習、長期休業中の家庭学習等で活用してください。
- 「みえの学力向上県民運動」のホームページ「先生のページ」からダウンロードできます。

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に向けて

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組みましょう。

～「主体的・対話的で深い学び」により実現したい子どもの姿～

主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できている。

「主体的な学びにより実現したい子どもの姿」※

興味や関心を高める

自分と結び付ける

振り返って次へつなげる

見通しを持つ

粘り強く取り組む

対話的な学び

子どもどうしの協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できている。

「対話的な学びにより実現したい子どもの姿」※

思考を表現に置き換える

共に考えを創り上げる

多様な手段で説明する

協働して課題を解決する

先哲の考えを手掛かりとする

など

深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できている。

「深い学びにより実現したい子どもの姿」※

思考して問い続ける

知識・技能を概念化する

新たなものを創り上げる

知識・技能を習得する

知識・技能を活用する

など

※独立行政法人教職員支援機構の Web ページには、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に取り組んでいる実践事例が 200 事例紹介されています。「子供たちの主な学びの姿」「学校段階」「教科等」で絞り込みをかけることもできます。ぜひご活用ください。
(<https://www.nits.go.jp/jisedai/achievement/jirei/>)

校内研修における授業改善のポイント

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた校内研修における授業改善のポイントについて紹介します。

「授業参観」では・・・

- ・何を見取るか → 子どもの学びの姿
- ・どこで見取るか → 子どもの表情が確認できる場所
- ・どのように見取るか → 文字言語で記述（メモを取る）



「主体的・対話的で深い学び」の視点から一人ひとりの子どもの姿を丁寧に見取り、記録することが大切！

「授業研究」では・・・

- ・子どもの名前を主語に語る → 「〇〇さんが、〇〇の場面で、〇〇と発言しました。」といったように授業の具体的な事実を子どもの名前を用いて語ることが大切！
- ・具体の事実で語る
- ・「代案」を示す → 授業中に見られた課題や生じた問題状況を、どのように改善すべきかを具体的なアイデアとして語り、意見交換する

協議の場をデザインする

- ・少人数グループでの協議 → 年齢、担当学年など多様に組み合わせる → 幅広い情報が集まる
- ・意見の集約 → ホワイトボード、ICT の活用
- ・情報の整理・分析 → 思考ツールの活用 → 協議で出された意見を可視化し、情報の整理分析を行うことで新たな知を創造する

「授業を中心とした校内研修こそが学校を生き生きとした場所へと変え、一人ひとりの子どもの学力を確かなものへと高めていく。1 年間に千回も行われる授業の質が高まれば、子どもは豊かに成長し、学校は活力に溢れる。」

「平成 30 年度新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト 報告書

『授業モデルを活用した校内研修を拓く～「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて～』より

<参考>

- ・ NITS 校内研修シリーズ No58 「『主体的・対話的で深い学び』を見取り、実現する校内研修」 田村 学（独立行政法人教職員支援機構 Web ページ）(<https://www.nits.go.jp/materials/intramural/058.html>)
- ・ 「平成 30 年度新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト 報告書 『授業モデルを活用した校内研修を拓く～「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて～』」(https://www.nits.go.jp/research/report/files/2018_report_002.pdf)

「新しい時代に必要な資質・能力」を育むために！



三重県教育ビジョン基本施策では、読書活動における目指す姿として、『子どもたちが、自ら読書に親しみ、楽しむことを通じて、多様な考えや価値観にふれ、想像力や思考力を高め、豊かな感性を育む』姿を掲げています。子どもの読書活動は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、探究心やよりよく生きる態度等を身につけていく上で不可欠なものであり、社会全体でそのための環境整備を推進していくことが求められています。

しかしながら、令和3年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙調査の結果では、授業時間以外に平日10分以上読書をする本県の小中学生の割合は、小学生が58.6%（全国平均61.2%）、中学生が46.1%（全国平均50.1%）と、全国平均を下回っています。

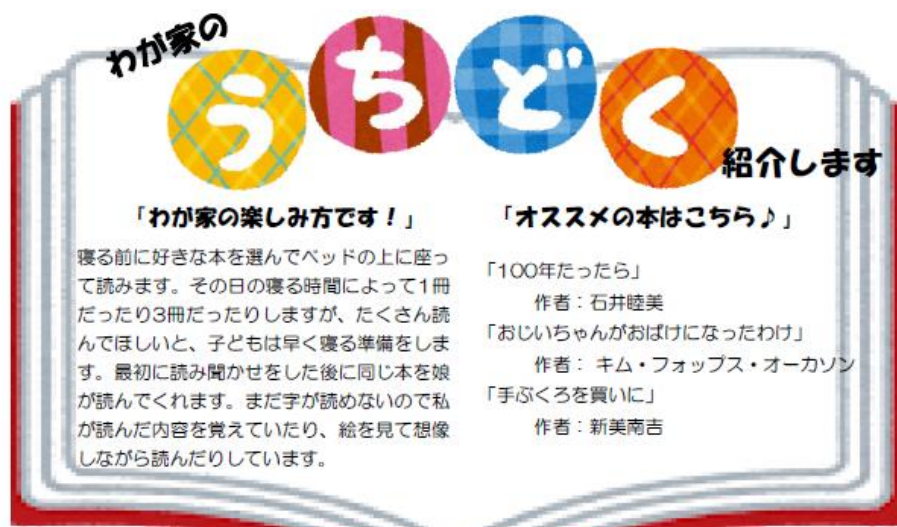
令和4年度までの5カ年計画が示されている「第四次『子供の読書活動の推進に関する基本的な計画』（文部科学省平成30年4月）」では、「読書を通じて、読解力や想像力、思考力、表現力等を養うとともに、多くの知識を得たり、多様な文化を理解したりすることができるようになる。また、文学作品に加え、自然科学・社会科学関係の書籍や新聞、図鑑等の資料を読み深めることを通じて、自ら学ぶ楽しさや知る喜びを体得し、更なる探究心や真理を求める態度が培われる。」とあります。精査した情報を基に自分の考えを形成し表現するなどの「新しい時代に必要な資質・能力」を育むことに資するという点からも、読書活動の重要性が高まっています。このことから、子どもの実態に応じて読書に親しむ活動を推進していく必要があり、以下の2つの取組が推奨されています。

- ・ 読書習慣の形成に向けた発達段階ごとの効果的な取組の推進
- ・ 友人同士で本を薦め合うなど、読書への関心を高める取組の充実

そこで、三重県教育委員会では、令和2年3月に策定した「第四次三重県子ども読書活動推進計画」で「発達段階に応じた読書活動」として、大人も子どもと一緒に読書に親しみながら、コミュニケーションをはかる「家読（うちどく）」の取組と友人等からの働きかけを伴いゲーム感覚で楽しみながら本を紹介し合い読書への関心を高める「ビブリオバトル」の取組を推進しています。

「家読（うちどく）」

家読とは「家庭読書」の略語で「家族ふれあい読書」を意味します。三重県では各家庭の読書習慣や読書の楽しみ方など、ともに楽しめる本や読み聞かせにふさわしい本などの情報を募集し、「うちどくポップカード」を作成しました。



右記のカードは102枚作成され、以下のURLで見ることができます。

<https://www.pref.mie.lg.jp/SHABUN/HP/000223493.htm>

（「家庭での読書活動を推進する取組」の所まで下にスクロールし、「カードはこちら」「1」「2」をクリック）

三重県教育委員会では、家族でコミュニケーションを図りながら読書に親しむ「家読（うちどく）」を推進するため、家庭での読書の楽しみ方や家族でともに楽しめる本を平成30年度に募集しました。このカードはみなさまから寄せられた声をご紹介しますため、作成したものです。

「ビブリオバトル」

ビブリオバトルとは書評合戦のことです。令和3年2月26日には紀宝町立井田小学校でビブリオバトルのデモンストレーションを、全校児童を対象に実施しました。子どもたちは県教育委員会の職員、井田小学校の先生が紹介する本の内容を一所懸命聞き、本の内容についてバトラー（発表者）にたくさん質問をしていました。

児童のアンケートから、参加した子どもたちの4割が「自分でも発表したいと思った」と回答しています。

当日の様子



自分の考えを表現し、学び合う算数科の取組

度会小学校では「つながり合い 高めあう仲間をめざして」を研究主題に掲げ、子ども一人ひとりにきめ細かな指導を行いながら、「さまざまな問題に対して自ら考え、自分の考えを表現し、協働的に解決していく力の育成」に向けて、算数科を中心に授業研究を進めています。

本年度は、これまでの授業研究の成果を生かし、「意欲を喚起し、見通しを持つ問題の提示」「問題解決過程を大切に数学的活動の充実」に重点を置き、さらに研究を進めています。

●● 算数科でめざす子ども像と具体的な手立て ●●

	低学年	中学年	高学年
めざす子ども像	- 自分の考えを具体的操作活動で表現したり、図や式などで表したりすることができる子 - 気付いたことを相手に伝えたり、分からないことを尋ねたりすることができる子	- これまでの学習を生かしながら、自分の考えをもち、図や式、言葉などで表現することができる子 - 気付いたことを相手に伝えたり、分からないことを尋ねたりすることができる子	- 既習事項を活用して、根拠をはっきりさせながら、図や式、言葉などを使って自分の考えを表現することができる子 - 質問や疑問を出し合い、意見交換したり、加除修正したりすることができる子
具体的な手立て	● 話型や既習事項の提示 ● 問題提示の工夫 ● ノート指導の徹底 ● T T 指導 ● I C T 機器の活用 身近な生活とつなげて問題を提示しているため、問題イメージをもちやすく、全国学調の質問紙でも「普段の生活で活用できないが考える」と肯定的に回答している児童の割合が高いです。 学習形態を工夫して指導を積み重ねているため、全国学調の質問紙では「算数の授業内容がよく分かる」と肯定的に回答している児童の割合が非常に高いです。		
			● 習熟度別指導

●● 効果的な手立てを取り入れた実践事例 ●●

● 習熟度別指導（5年「分数のたし算、ひき算を広げよう」）

・子ども一人ひとりの主体性やこれまでの学習内容の理解度などを把握し、**コースに応じた学習形態**を取り入れることで、習熟度に応じた説明する活動を展開しています。

＜基礎コース＞ 10人程度で設定
○「分数の意味や大きさ」を想起させながら問題を捉えさせ、**途中までの考えやわからないところをペアで聞き合い、共有したことを全体で解決しながら授業を展開**

＜標準コース＞ 20人程度で設定
○既習内容との違いを共有させながら問題に取り組ませ、分数が小数のどちらかに「そろえて計算する」ことに**焦点化させてペアで説明する活動**を中心に授業を展開

＜発展コース＞ 30人程度で設定
○4種類の問題を4人編成の班で分担して取り組ませ、他班で同問題を担当している友だちと**相談したことをもとに、自分の班の友だちに解き方を説明する活動**を展開

● I C T 機器の活用

・実際に操作をしながら考えたり説明したりできるよう、**協働学習支援ツール**を活用し、実際の場面を想起しながら考えさせる授業を展開しています。

＜3年「あまりのあるわり算」＞
○ケーキやタイヤなどのイラストを実際に操作して考え、あまりの処理について気付かせる授業を展開



＜電子黒板の活用＞

● 見通しをもたせるための問題提示の工夫

・問題場面を想定したり、主体的に予想や比較を行ったりできるよう、**問題の内容や提示のタイミングを工夫**し、学習内容やそれに迫るめあてに近づくような授業を展開しています。

＜2年「長さをはかってあらわそう」＞

○3本の鉛筆を問題にし、長さを比べる活動の中で、**見た目や任意単位での比較をさせながら、普遍単位の必要性に迫るめあてを提示する授業を展開**



＜見た目や任意単位での比較から普遍単位の必要性に迫る＞

●●●度会町立度会小学校長より●●●

本校は、指導教諭を研修のリーダーとして、算数科でめざす子ども像を明らかにし、具体的な手立てをもって全教職員で取り組んできました。また、I C T 機器を活用した取り組み、単元の内容によって習熟度別指導やT T 指導を柔軟に取り入れてきました。その結果、児童の学力が向上し、児童一人ひとりの学習に向かう姿勢が劇的に変化していきました。そのことが、児童の自尊感情の高まりに大きく繋がっています。今後も『チームW A T A R A I』を合い言葉に授業改善を着実に進めながら、児童の学力向上に取り組んで参ります。